

前世で辛い思いをしたので、  
**神様が謝罪に**  
きました

God came to apologize  
because I had a hard time  
in the past life



初昔茶ノ介

Chanosuke  
Hatsumukashi



# Characters

登場人物紹介

## フレル

アルベルト公爵家の次期当主。有能なイケメンで、領民からの信望が厚い。

## キャロル

フレルの妻。活発な美人で、厳しくも優しくサキ達を見守る。可愛いものに目がない。

## アネット

フランの二つ下の妹。サキが大好き。背伸びしたがりでおしゃまな性格。

## フラン

アルベルト公爵家の子供。爽やかで優しいが、実はちょっと腹黒いところも…?

## ネル

女神ナーティ様がくれたサキのお付きの猫。様々な魔法でサキをサポートする。ちなみに女の子。

## アニエ

魔法学園の生徒。学年一の魔法の実力者で、勝気なしっかり者。わけあってブルーム公爵家の養子になった。

## サキ

不幸ばかりの前世を神様に謝罪され、幼女として異世界転生した。桁外れな才能を持つものの、コミュ障で人見知り。

毎日、本当に嫌なことばかりだ……。  
「おい、またこんなくだらないミスをしてるのか！」

部長の怒号がオフィス内に響いた。怒られるのは本日一度目だ。  
私——あめやさき雨宮咲は、部長のデスクの前で縮こまっていた。

「……す、すみま」

「ああ？ 何をボソボソ言つているんだ!?」

部長がバンとデスクを叩く。

ただでさえ話すのが苦手なのに、ますます小さな声になる。

「……す、すみせん」

やつと口にすると、部長がフンと鼻を鳴らす。

「まったく、一体いつになつたらこんなミスをしなくなるのかね？ やる気がないなら辞めたらどうだ」

「あ、あの……少し、寝不足で……」

昨日は同僚から仕事を押し付けられ、日付が変わる頃まで会社に残つていた。

それでも終わらず早朝に出勤したため、ほとんど寝ていない。

「言い訳は聞かんよ？ 生活習慣を整えることくらい、社会人なら当たり前だろう。寝不足だなんて、まさか毎晩男と遊んでいるのか？ ……いや、君みたいな容姿じゃ無理か」

部長が馬鹿にしきつた様子で言う。周りの同僚からも、クスクスと嫌な笑い声が聞こえてくる。

パワハラ、セクハラ、モラハラ……こんな扱いは日常茶飯事だ。

部長からの説教が終わり、ため息をつきながら席に戻る。

「ねー、雨宮さん。ちょっと今日用事があつてさー。私たちの仕事もやつてくれない?」

「え……」

でも、昨日だって……。そう思うけど、口に出せない。

私と違つて自信たっぷりで、華やかな彼女たちを前にすると、引け目を感じてしまう。

「お願い！ どうしても外せない用事があるの！ 雨宮さんならやつてくれるよね？」

「……わ、わかった」

「ほんと？ ありがとう！ 雨宮さんみたいな人がいて助かるわー」

デスクに分厚いファイルが何冊も積まれる……これはまた残業かな、残業代なんて出ないのに。

——私の人生は、こんなことばかりだ。

小さな頃から、酒癖の悪い親に虐待(きやくたい)されてきた。

小学校から高校までは、クラスメイトにイジメられた。原因は親の暴力でできた身体の痣(あざ)だ。地元を離れれば何か変わるかもと思い、実家を出て、自分で学費を稼いで大学に進学した。

けど、結局周りから避けられた。ようやくできた彼氏も、私の痣を気味悪がって、別れを切り出してきた……それ以来、自分の外見に自信がなくなつた。

就職しても、扱いが変わることはなかつた。

こんな人生、終わらせたほうがいいのかな……。

何度も考えるくらい辛かつたけど、結局怖くてできなかつた。

そして今日も、同僚にこき使われている。

自分の業務さえこなしきれないブラック企業だというのに、こんな仕打ちをされたら深夜まで残業になる。

私に仕事を押しつけることに成功した同僚たちは、今夜会う男性たちの話題で盛り上がり上がつていた。きっと今日もデートや合コンへ向かうのだろう。

はあ……嫌になる。今日中に終わるかな?

私はみじめな気持ちになりながらも、仕事にとりかかつた。

ようやく片づいたところで時計を見ると、午前零時を過ぎていた。

またこんな時間だ。終電に間に合うかな……。

本当は会社の制服を着替えたいところだけど、そんな暇なさそうだ……。

帰ろうとして会社を出ると、突然大雨が降りだした。

……最悪。

私は鞄を頭に載せ、駅までダッシュすることにした。  
ヒールとはいえ、十分か十五分で着けるはずだ。

びしょ濡れになりながらも走っていると、ようやく駅が見えてくる。

その瞬間だった。

光が私を包み、全身に激しい痛みが走る。同時にすさまじい音が耳をつんざいた。

何が起きたのか理解できないまま、気づくと地面に倒れていた。

え……何……？

薄していく意識の中で、周りの声が聞こえてくる。

「おい！ そこに雷が落ちたぞ！」

かみ……なり？ まさか、私に……当たつ……た？

私、雷で感電して……死ぬの……？

何、その人生——バカみたい。

神様は、私にひどい人生を与えたもんだね。

せめて少しくらい、楽しいことがある人生を送りたかった。神様に文句の一つも言いたくなる。  
でも、そうか……これで、終わっちゃったんだ——

「いやあ、ほんっとそれなー、これで終わりとかないありえなくない!? つて思うよねー」

と、思つたのに……なんか、軽そうな口調の声が聞こえてきた。

……私は死んだんじゃないの？ というか、なんで私が考えていることがわかるの？  
しかも文句に相槌あいづちを入れてくるなんて、まさか——本当に神様？

でも、こんな適当な話し方する神様がいていいわけ！？

「そんなこと言わると耳が痛いなあ。まあ、とりあえず目を覚ましなよ」

私はゆっくり目を開け、立ち上がった。

「何、ここ？」

なぜか身体の痛みが消えている。辺りは何もない、真っ白な空間だ。

そして目の前には——見るからにチャラそうな男の人が立つていた。

明るいミントグリーンの髪の毛は、ワックスで整えたような無造作ヘアード。服装はダボツとし  
たパークーにスキニージーンズ、ごついスニーカー。  
喋り方といい、外見といい……パリピっぽい。

「やあ、雨宮咲さん」

気安い感じで話しかけられて、後ずさる。

「……あ、あの……お会いしたこと、ないと思うんですが……」

おかしい。私はこの人に見覚えがない。でも、この人は私のことを知っているみたい。

ただでさえチャラそうなのに、怪しすぎる……。私は思わず身構えた。

「そんなに警戒しないで。服とかもこの世界に合わせてるんだし、怖くないっしょ!? ボクはこの世界を担当してる神の一人、ラスダっていうんだ」

神様……本当に神様？ こんな人が!? 変な髪色の、パリピな大学生にしか見えないけど……。疑いの目でじろじろ見てしまう。だけど、神様は気にした様子もなく続ける。

「いやー、実は咲さんが落雷で死んじゃったのって、ボクの手違いなんだよね」

「て、手違い？」

「そ、実は世界を管理するために、定期的に試練みたいなものを与えてるんだ。そうしないと、世界のバランスが悪くなるんだよね。キミのいた世界でいえば、台風とかの自然現象かな。今回は雷を落としたんだけど、たまたまというか、やつぱりというか、その位置にキミがいてさー」

何？ ジャア、私が死んだのは神様のせいだったの!? というか、「やつぱり」って何？

何がなんだかわからないでいると、神様がパンツと手を合わせて頭を下げるてきた。

「いやー、マジでごめん」

か、軽いな!? 神様からすれば私一人の命なんてどうでもいいんでしようけど！

そんな心のツッコミに応えるように、声が響く。

「ラスダ！ あなた、その態度はなんなの!?」

ふいに女の人が現れた。女人は、神様——もう呼び捨てでいいや、ラスダの頭を後ろから思いっきりひっぱたいた。

突然の登場にびっくりしたけど、よく見るとすごくきれいな女性だ。

ラスダと同じ明るいミントグリーンの長い髪に、透き通るような水色の瞳——まるで教会で目に見える聖母様みたいに神々しい姿をしている。

「いつて！ 何すんだよ姉貴！」

ラスダが頭を押さえる。姉貴ってことはつまり、ラスダのお姉さん？ この人も神様なのかな。むすつとしたラスダを、女神様らしき人が叱りつける。

「これはあなたの責任なよ!? 神は全ての人に平等、それをあなたは——」

二人が揉め始めた。

一体どういうこと……？ 当事者の私には、全然わかつてないんだけど……。

そもそも、全ての人に平等なんて……そんなわけない。

ラスダは世界を管理しているとか言ってたけど、私の人生は苦しいことばかりだった。みんなが私みたいに、苦しみばかり受けているわけがない……。すると、女神様が氣の毒そうな様子で言う。

「そうなのです。咲さん」

この人も、私の考えていることがわかるみたいだ。

それよりも、さつきから「やつぱり」とか、「そこののです」って……、どういうこと?

事情が呑み込めないと、女神様が話し始める。

「私はこの世界を担当しているもう一人の神、ナーティといいます。この世界で生まれる人が皆、平等に幸福を手にできるよう管理していました。しかし、私の愚弟——このラスダが職務をサボりました。その時に生まれてしまったのがあなたなのです」

「えっと……つまり?」

ナーティ様は「ごもる。そのあと、重苦しい表情で告げた。

「申し訳ありません。手違いにより、あなたに幸福は一切存在しなかつたのです」

私は言葉を失った。

なんだ、それ……。私、神様のせいでの不幸になるよう生まれたつてこと……?  
もう死んでいるんだから関係ないかも知れない。でも、たとえ謝罪されたつて、わざわざ神様からそんな事実を聞きたくなかった。

ショックのあまり、呆然としてしまう。

辛い人生が当たり前で、もう泣くことなんて忘れたと思つてたのに……涙が出てきた。

ナーティ様は気の毒そうに言う。

「本当に申し訳ございませんでした……。生きている間、あなたがどのように生活していたのかはわかっています。どれだけ苦しく、辛い思いをしてきたのか……。そこで、私からの提案です」

「提案……?」

「私たちが管理している世界は他にもあります。その世界で、もう一度人生をやり直していただきたいのです。咲さんが幸福になるよう、この愚弟に代わって私があなたを再構築します。いかがでしょうか?」

今まで散々ひどい目に遭つてきたのに、そんな話、信じられるわけない……。

でも、辛い人生だったからこそ、一度でもいい、幸せになつてみたい気持ちもあつた。

悩んだ末に……口にする。

「そこでは、幸せになれますか……?」

「はい。あなたがこの世界で苦しんだ分、多くの幸福がもたらされることを、神の名のもとにお約束いたします」

「でも……」

私なんかが本当に幸せになれるのかな……やつぱり信じられない。

そう思つて俯いていたら、ナーティ様に抱き寄せられる。

「咲さん、あなたはこれから幸せになれるのです。幸せになるのは、人としての当然の権利です。望む形で、好きに生きていいんですよ」

あつたかい……。人に抱きしめられるつて、こんな感じなんだ。  
親にさえ、こんな風に優しくされたことなかつた……。

ナーティ様から、あたたかさが伝わってくる。その温もりで、次第に私の目頭が熱くなる。

私のことを助けようと……幸せになれるって言つてくれて……。

何もかも、初めての出来事だ。私の目からはたくさん涙が溢れた。

今まで知らなかつた。嬉しさでも、泣いちゃうことつてあるんだね。

「よろしく……お願ひします……」

ひとしきり泣いた後、ナーティ様が優しく聞いてくれる。

「では次の世界での幸福のために、何か希望はありますか？」

「……えっと、せっかくやり直すなら、できれば若くしてもらつて、最初は森なんかで読書とかしながらのんびりしたいです……。それと……少し、可愛い子になりたい……かな？」

人と接するのは苦手だ。今まで利用されるか、怒られるかのどちらかだつた。

だからしばらくは誰にも会わず、一人でのんびりしたい。

それに今より少しでも見た目がよければ、トラブルが減るかもしれないし……。

「わかりました。では、この子をあなたに」

ナーティ様が両手を広げると、その間に小さな子猫が現れた。

子猫は真っ白で、ふかふかな毛並みをしている。動物は飼つたことないけど、テレビで見た優雅なもふもふの猫ちゃん——ペルシャ猫に似ているかも。

「この子はあなたのためを作りました。あなたに尽くし、命令に従います。そして、【ブツク】の魔法が使えます」

「ブツク？」

「はい。今から行く世界には、魔法があるのです。ブツクと声をかけてもらえば、この子は本に変身します。色々な本に変わるので、新しい世界での物語や歴史書、なんでも好きな本を読めますよ。加えて、咲さんが知りたいことを尋ねれば、本の上で文字にして答えてくれます」

そう言いながら、ナーティ様は子猫を私に抱っこさせた。

ふわふわして、あつたかい……私は笑顔になつた。

「ちなみに、魔法についても咲さんに不利益がないよう考慮するのでご安心ください」「何から何まで……すみません……」

「いえ、当然のことです。それだけの苦しみを、あなたは受けていたのですから……。では、そろそろ転生させます。最後に、何か気になることはありませんか？」

「不安がないって言つたら、嘘になりますけど……困った時は、この子を頼ります。ナーティ様、ありがとうございます。私……これから幸せになります」

「お礼などいいのです。全てはこの愚弟のせいなのですから」

ナーティ様がもう一度ラスダを力強くひつぱたいた。

「痛つ！」

「あなたも、少しさはまじめに謝つたらどうですか！」

「……ご、ごめんなさい。次の世界では幸福になつてよね。ボクも祈つてるからさー！」

……まだチャラいけど、ラスダはいちおう頭を下げてくれた。

「では、あなたに幸福があらんことを。これからは望むままに、自由に生きてください」

「……はい」

私は白い光に包まれ、眩しさに目を閉じた。

そして次に目を開けると——知らない森に立っていた。

## 1 異世界生活の第一歩

光が顔に当たり、眩しさで目の上に手をかざす。

辺りを見回すと、私はたくさんの木々に囲まれて立っていた。

緑に溢れ、木漏れ日が降り注ぐきれいなところだ。

「ほんとに、森にいる……」

呟いて気づいた。なんだか、声が高い……というより、幼い感じがする。

側に川が流れていたので、近づいてみると、見覚えのない顔が映つていた。



「これが、私!?」

見た感じ、年齢は五歳くらいかな？

肩くらいの長さの、キラキラ輝く銀の髪……それに、幼いけど整った顔。ちょっとたれ目でのんびりしてそうな——自分の顔だからこんなことを考えるのは恥ずかしいけど、庭で微笑みながら紅茶を飲んでるお嬢様ってどこかな？

少し可愛くとはリクエストしたけど……少しどころか、ものすごく可愛い顔になつていてる。なんだか照れるけど、こんな可愛い女の子になれたのは嬉しい。今の服装は白いワンピースだけど、こんなに可愛くなれたなら、色んな服を着てみたいかも……。

でも、ちょっと若くしすぎじゃないかな？

まだ見慣れない顔を両手でムニムニしていると、鳴き声が聞こえた。

「にゃあ」

そつちを見ると、ナーティ様に渡された猫ちゃんが座つていた。ふさふさの尻尾をぱたん、ぱたんと左右に動かしている。

「あ、ごめんなさい。あなたのことを忘れてたね」

私が抱っこすると、まつたくですと言わんばかりに「なう」と鳴く。か、かわいいよお。この猫ちゃんをもらえたことも、かなり幸せ……。

「そういうえば、本になれるのよね？ 確か……ブツク！」

ナーティ様の言つていたように、子猫に声をかけてみると、空中に浮かび、本に変身した。

「おおー！ 猫が変身するなんて、魔法の世界つて感じ！」

私は初めて見た魔法に感動しながら、その本——もとい、本になつた子猫を手に取つた。大きさは雑誌くらい。ページをめくつてみると、全てが白紙だつた。

「あ、そつか……」

ナーティ様が、知りたいことを文字にして教えてくれるつて言つていたよね。

「何か聞いたらページに出てくるのかな。えつと……。猫さん、この世界のことを教えて？」

なんだか、スマートスピーカーみたい……。

そんなことを考へていると、ページにじわじわと文字が現れた。

『ここは魔法の世界、シャルズ。この世界では誰もが魔力を持ち、魔法の技能が全て。魔法に優れた人たちが、王族や貴族として国を治めています』

魔法に、王様や貴族があ……。元の世界では考えられないね。

そんな世界に転生したつてことは、この猫さんだけじゃなく、私にも魔法が使えるのかな？ 幸福になるように再構築するつて言われたけど……特に今までと違う感じはしない。

ともかく、この子の使い方はわかつた。

「あなた、名前は？」

またページの上にじわじわと文字が浮かぶ。

《女神ナーテイ様より、ネルの名を賜りました》

「ネルっていうのね。じゃあ、ネル。この近くに落ち着ける場所はある?」

《ここからまっすぐ進んだところに、居住に適した洞窟があります》

ナビ機能もあるなんて、高性能……。

「洞窟ね。わかつた、もう猫に戻つていいよ」

私が言うと、ネルは本からふわふわの子猫の姿に戻つた。  
五歳くらいの私としては、両手で抱えるとちょうどいいサイズだ。ネルを抱っこしたまま、洞窟を目指して歩き始める。

五分ほど進むと、目的の洞窟に着いた。

確かに、入り口が木々に覆われていて、ここならゆつくりできそーかも!

「うん……いつたんここにいようかな」

私は中に入ると、目についた大きな石に腰かけた。

さて……これからどうしよう?

ネルと一緒に、しばらくまつたりと読書生活を楽しむつもりだけど……そういえば、森で暮らしたことなんてない。

まずは、お家を作る? でも、家を作るのって、地面をならして、基礎を作つて、木を切つて……つて、考えるだけで大変そう。

幸せな引きこもりライフを送るつもりだったのに、早くも不安になつてしまつた。

いやいや、でも慌てない。私にはネルがいるもん。

「ブツク! ネル、私、これからどうしたらいいかな?」

《食糧と住環境の確保が最優先事項であると推察します。そのためにはまず、魔法の習得が必要となります》

『魔法の習得……』

そつか、私も魔法を覚えられるんだ。

魔法……想像したらわくわくしてきた。

ナーティ様は私が幸せになれるように考慮してくれるつて言つてたし、もしかしたら他の人はは見えないような、すごい魔法を使えるようになつちやつたりして!

《……サキ様》

「はつ……」

何も聞いてないので、ページの上にツッコミが浮かんでいる……。

は、恥ずかしい。つい妄想にふけつてしまつた。

浮かれている場合じゃないね。今はお家も、布団も、ごはんもない。

「じゃあ……まずは魔法を覚えよう。ネル、魔法について教えてくれる?」

『魔法とは魔力を用いた能力全般を指します。魔力には属性があり、生まれ持った属性の魔法しか行使することはできません』

「ふーん、どんな属性があるの？　あと、私の属性も知りたいな」

『属性は炎、水、風、雷、土、草、光、闇、空間、治療、特殊の十一種類があります。サキ様の属性は全てです』

「全て……って、全部つてこと!?」

さらつと『言われたけど、ものすごいことのような……』

「それって、普通のことなの？」

『普通ではありません。生まれ持つ魔法の属性は、平均で二つほどです。サキ様に自由に魔法を覚えてもらいたいという、女神ナーティ様のご配慮です』

「そ、うなんだ……」

ナーティ様、ありがとうございます。

心の中で呟くと、ページをめくつてネルの解説を読み進める。

『魔法には、十段階の威力のランクが存在します。これに該当する魔法は【ナンバーズ】といい、この世界の魔法の基本となっています。一番下のランクで、生活で役立つ程度の威力のものを【第一】と呼びます。この他、ナンバーズに特性を付与する【ワーズ】、属性を付与する【エンチャント】、ナンバーズ以外の【オリジナル】と呼ばれる魔法も存在します』

うわあ……急にいっぱい文字が出てきた。

「え、えっと……。とりあえず、ナンバーズの第一ランクから魔法を覚えていけばいいのね？」

『はい。さつそく使ってみましょう』

「え？　急に言われても……」

いくら魔法の世界でも、そんなに簡単に使えるものなの？

戸惑う私にはおかまいなしで、本に文字が浮かぶ。

『まずは右手で私に触れてください』

促されるまま、白紙のページに手を置いてみた。

あれ……、少しあつたかい……。

というか、あつたかい何かが、ページから流れ込んでくるみたい。

『今、触れている部分から熱を感じると思います。これが魔力です。魔力はサキ様の身体にも流れています。目を閉じて集中すれば、感じ取れるはずです』

「や、やつてみる」

ネルの指示通りに目をつむって、身体の中に意識を向ける。

すると、今まで感じたことのないエネルギーを見つけた。

「ネル、これのこと？」

目を開くと、本に文章の続きを浮かんだ。

『では、その魔力を手に集めて』  
さつきのあつたかいエネルギーを手に移動させる……そうイメージしてみると、右手がだんだん熱くなってきた。不思議な感覚……私は目の高さにかざす。

『その熱を炎に変えるイメージで、【フレア】と唱えてください』

「……フレア！」

右手の先に赤い魔法陣が浮かぶ。そこから拳くらいの炎がぱんっと飛び出して、すぐ消えた。  
「で、できたー!!」

一瞬だつたけど、これが魔法だよね!? 本当に私にも使えるんだ、すごい!

『おめでとうございます。魔法スキル【第一フレア】を習得しました』

「ス、スキル?」

はしやいでいたら、また知らない言葉が出てきた。

『スキルとは、経験から獲得する技能のことです。魔法スキルの他、武術スキル、常態スキルが存在します。常態スキルのみ、無意識かつ恒常に発動することができます』

うう、また文字がいっぱい……。

「魔法と魔法スキルって、なんか違うの?」

『魔法は魔力・媒体・イメージの三つが揃えば発動可能であり、スキル化は必須ではありません。ですが魔法スキルとして習得することで、通常より発動の速度が速くなり、消費魔力は半分以下に

なります。ただし、第一フレアのようにナンバーズとしてスキル化するためには、発動の経験を重ね、常に一定の威力にコントロールする技量が必要になります』

「え?」

思わず首を傾げる。スキル化って、思つたよりずっと大変なことみたい。

「でも、おかしくない? 私は一回やつただけでスキルになつたよ?」

『それは、サキ様の常態スキルのおかげです』

「常態スキル……?」

ますますわけがわからない。

「ネル、スキルって経験を積んで覚えるんでしょ? 私、この世界に来て一時間も経つてないし、常態スキルなんて持つてないよ」

『生前の経験により、サキ様には現時点で常態スキルが存在します。加えてナーティ様の恩恵により、サキ様のための特別なスキルも獲得されています。サキ様の常態スキルを表示しますか?』

「じゃあ、お願い」

半信半疑で見せてもらうと、どんでもない内容が示されていた。

「何……これ?」

自分ででは全然わからなかつたのに、何個もある。しかも、すごそうな内容のものばかりだ。

【精神耐性】100%、【物理耐性】50%……!』

《耐性は精神・肉体にダメージを継続的に受けると獲得される常態スキルです。ダメージを受けた時間や量により、カット率が上昇します》

それじゃあ、これは私が前世で受けた虐待やイジメ、あと、社畜生活の成果?

こんなことでも役に立つのか、異世界つて。痣や心の傷は前世では辛いだけだったけど、今度は私の役に立つ力に変わってくれたみたいだね。

「あとは、【習得の心得】?」

《習得の心得は、スキル化を強力に補助する常態スキルです。これがナーティ様の恩恵であり、先ほど第一フレアを獲得できた理由です。通常、スキル化には膨大な経験が必要となります。ですがサキ様は、一度技の発動に成功する、もしくは他者から教えられて概念を理解するだけで、スキルが獲得できます》

要するに、私は人より簡単にスキルを手に入れられるってことだよね?

何それ、すごい! ナーティ様ありがとうございます!

「それに、【変質の才】?」

《変質の才は、習得したスキルに改良を加え、別のスキルを生み出す常態スキルです。こちらも、ナーティ様の恩恵です》

ただでさえ簡単にスキルをゲットできるのに、さらに自分でもどんどんスキルを作れちゃうってこと? ナーティ様、私をひいきしすぎじゃないかな?

「うう……」

「すごいすげ、使いこなせるか自信なくなってきた……。で、でもとにかく、どんどんスキルを習得しなさいってことだよね? よーし、まずはナンバーズを覚えていくぞお!」

こうしてネルの指導のもと、魔法の練習に取りかかった。

私は一度集中しちゃうと、他のものに目が行かなくなる。

全属性の第一ランクを習得したところで、日が暮れかけていることに気がついた。

お腹の虫がぐうと鳴く。

「うう……」

「そういえば、こっちの世界に来てから何も食べてない。

スーパーなんてあるわけないし。食べ物……どうしよう。

「ネル、この近くに食べられるものってないかな……?」

《この洞窟から三分ほどの場所にアポルの木があります。サキ様の世界でいう、りんごのような果実を実らせます》

「よ、よかつた……じゃあ採つてこようかな。ネル、猫に戻つて案内してくれる?」

私は子猫姿のネルを抱っこして、洞窟を出た。

方向を間違えると、ネルが鳴いて教えてくれる。

本当にネルがいてくれてよかつた……。まだよくわからないこの世界だけど、おかげで心細くない。

ネルの教えてくれた通り、三分ほどぐつやつやした赤い実がたくさんなった木を見つけた。これがアポルだよね？

「美味しそう！」

側に駆け寄つて手を伸ばす。けど……五歳の身長では、一番低い枝にも手が届かない。

「ど、どうしよう……えいっ！」

私は落ちている枝を拾つて、精一杯背伸びしながら振り回す。だけど葉っぱを掠めるだけで、なんの役にも立たない。

しばらく奮闘していると、ネルが「なあ～ん」と鳴いた。

「はっ……」

振り向くと、ちよこんと座つたネルが残念そうな顔でこっちを見ている。

今は猫だけど、なんとなくわかる。

この感じ、『サキ様……』と呆れながらツッコミを入れられている気がする。

「……そうよ！ こういう時のための魔法！」

実感がわいてなかつたけど、私は今、魔法が使えるんだつた！ よし、練習の成果を試すぞ！

アポルの木に手を向け、唱える。

〔第一ウインド！  
シグル〕

風の刃が木に飛んでいく。かまいたちのように枝を切断し、アポルの実を三つほど落とした。

「やつたー！！ できたよ、ネル！」

ネルも満足げ頷いて、「にゃあん」と鳴いてくれた。

私はネルを頭に乗せ、収穫したアポルの実を抱えて洞窟に戻つた。そのうち本格的に暗くなつてきたので、その辺で小枝を拾い、洞窟の中で焚火たきびをした。おかげで夜になつても明るいし、結構あつたかい。

ぱちぱちと燃える焚火の前で、アポルをかじる。味もりんごそのもので、甘酸っぱくて美味しい。ネルも食べる？ って聞いたけど、首を横に振られた。魔法の猫だから、ナーティ様から魔力の供給を受けていて、お腹は減らないんだつて。

満腹になつたところで、今後のことを考えてみる。

ネルでアニマルセラピーできたおかげか、魔法を使えた達成感のおかげか……どん底だつた心が少し元気になつた。

でも、人に会うのはまだ怖い。コミュ障だし、人見知りだし……。

ナーティ様にリクエストした通り、しばらくこのままのんびり森で暮らしたいな。

今日はネルに色々なことを教えてもらつただけだつたけど、ブックを使えばこの世界——シャルズの本なんかも読めるんだよね。

朝からのんびり読書して、ネルと魔法の練習をして、夜はきれいな星を眺めながらゆっくり眠りにつく……。はあ、考えただけでなんて素敵で悠久自適な生活なの……。

そういうえば、前の世界で子供だった頃は、楽しいことなんてなかつたな。親におもちゃを買ってもらつたこともないし、お小遣いもない。おかげで、友達から仲間外れにされていた。

気晴らしといえば、学校の図書室で借りた本を読むことくらい……それさえも、お手伝いと称して家事をほとんど押しつけられ、読みきれないことも多かつた。

でも……私はもう自由なのだ。酒を飲み暴力を振るう親も、私をいじめる同級生も、嫌がらせてくる同僚や部長もいない。

好きな時に起きて、やりたいことができるのだ……なんて幸せなんだろう！

私はシャルズにやつて来た喜びをかみしめつつ、この森で生活していくことを決心した。

——こうして私が森で生活を始めて、早くも三ヶ月が過ぎようとしていた。

転生したての時は、森でのサバイバル生活がちよつと心配だつた。

けど、ネルがなんでも教えてくれるおかげで、不自由なく暮らしている。

グランド属性の魔法で家具が生み出せるとわかり、机や椅子やベッドを作つた。洞窟をさらに拡張してリビングや寝室に部屋分けし、トイレやお風呂も設置してある。

「今日のごはんは何がいいかなー」

鼻歌を歌いながらドアを開ける。ドアの向こうは日当たりのいい庭みたいな感じだ。

洞窟の天井の一部に穴を開けたこのスペースでは、果物や野菜を育てている。

これは草<sup>ウイート</sup>属性の魔法を覚えたおかげだ。茶葉を育てて、紅茶を作ることにも成功した。

初めの一週間くらいは森の果物を食べていて、最近は狩りに挑戦していて、お肉を食べることもある。動物の解体ができるか心配だつたけど、精神耐性100%のおかげか、比較的楽にこなすことができた。

家も食べ物も充実して、森の生活はさらに理想的なものになつていて。

ちなみに今着ているお洋服は、ナーティ様特製だ。だから自動洗浄されて、伸縮自在なんだつて。ネルのブックのおかげで、シャルズの文化や歴史の本も読めている。毎日の読書で、文字や社会のことを勉強した。世界を救つた勇者と賢者の物語の本なんかも面白かつたな。

退屈もしないし、寂しくない。ずっと森で暮らしてもいいかもと思えてくる。

「にゃーん」

「あ、もうそんな時間？　じゃあ出かけようか」

ネルに促され、私はある場所へ向かう準備をする。

ちなみに洞窟の入り口には<sup>グランド</sup>土属性魔法で扉を作つてあり、鍵をかけてから出発する。もう洞窟のことを勉強した。世界を救つた勇者と賢者の物語の本なんかも面白かつたな。

というより、立派なお家だね。

しばらく森を進むと、開けた草地に一匹の熊の姿が見える。

一匹は二メートルくらいある大人の熊、もう一匹はまだ子熊だ。

「クマノさん、クマタロウくん！　お待たせ！」

二匹は顔を上げ、私のところへ駆け寄ると、頬を舐める。

実は二ヶ月ほど前、この熊の親子が狼に襲われているところを助け、懐かれたのだ。それ以来、ずっと仲良くしている。

すごく嬉しかった。異世界で、ううん……今まで、初めてできた友達だ。ネルはもちろん大切だけど、ナーティ様が私のために与えてくれた存在だ。

自分から仲良くなれた友達は、クマノさんたちが初めてになる。

ちなみに、大人の熊がクマノさん（私命名）、小熊がクマタロウくん（私命名）。

「クマノさん、元気だった？ クマタロウくん、また大きくなつた？」

私がそう言うと、二匹は軽くのどを鳴らして首を傾げる。

キラキラしたつぶらな瞳……ま、眩しいよお。

可愛さに感激していると、クマタロウ君がすり寄ってきた。

クマタロウくんはまだ幼く、大きめの子犬くらいのサイズだ。むくむくした姿にほっこりする。

背中に一筋、白い模様があるのがトレードマークだ。

私がクマタロウくんの頭を撫でると、気持ちよさそうに目をつむる。ああ……癒されるよお……。

ちなみに、ネルはクマノさんたちの言葉がわかるみたいで、通訳をしてくれている。

「それじゃあ、今日もお願ひします」

私はクマノさんにペコリとお辞儀をした。すると、クマノさんが後ろ脚で立ち上がる。

私とクマノさんは——組み手を始めた。

ネル曰く、一人前の魔法使いになるには、戦闘技術が必要らしい。

まつたり読書生活ができるだけ……ナーティ様が授けてくれた色々なスキルのおかげで、魔法を覚えるのは楽しい。

魔法に武術が必要なら、それも頑張ってみたいと思つた。

こんな前向きな気持ちになるなんて、前世では考えられなかつたな……。

そんなわけでネルの提案により、定期的にクマノさんと組み手をしてもらうことになつたのだ。これが中々大変で……手加減はしてくれているんだろうけど、やはり熊……怖いのだ。

二時間ほど組み手をしたところで、ネルがにやーんと鳴く。

それを合図に、私たちが動きを止め、再びお辞儀をする。

クマノさんたちと出会つてから二ヶ月。初回は一撃でやられていた私も、だいぶまともに相手をしてもらえるようになつた。

組み手の後は、クマタロウくんとじやれて遊ぶ。

私がクマタロウくんをわしわしと撫でていると、ゴロンとお腹を見せて寝転がる。

ぐるぐるむつくりでまん丸な姿はとても愛らしくて、頬がゆるむ。

ころころしたお腹を撫でていると、クマタロウくんはご満悦な様子でなすがままになつていて。ちよつと手を離すと、寂しそうな顔でこちらを見る。『もう撫でてくれないの？』と言わんばかり

りで、キュンキュンしてしまった。ついハイテンションになつて、クマタロウくんをもみまくる。

「ここ？ ここが気持ちいい？ ああ～この毛並み、癖になつちゃうよお～」

クマタロウくんとの触れ合いを満喫していると、普段は大人しく私たちのことを見守っているクマノさんが、突然立ち上がつた。

「クマノさん？ どうかした？」

「グルルル……」

クマノさんが牙をむき、唸り声をあげる。クマタロウくんもどこか怯えた様子だ。

どうやらクマノさんは、茂みの向こうを威嚇しているみたい。

私はクマタロウくんをクマノさんの側に避難させて、様子を窺つてみることにした。

## 2 初めての魔物

「ネル、ブック」

こんなクマノさんは初めてだ。もしかして、未知の生物なのかも……。

「茂みに何か潜んでいるみたい。なにかわかる？」

『狼の群れと思しき生態反応があります。中でも、一体だけ異様に能力値の高い個体がいます。狼

が魔物化して風属性を得た【ウインドウルフ】と推測します』

「魔物化!?」

『魔物化とは、動物の心臓が魔石化して起きる現象です。そうなると通常の動物と違つた特別な能力を手にし、戦闘能力が高くなり、魔法を行使します。また、もともと群れを作る動物なら、群れを統率して襲つてくることもあります』

魔法だけじゃなく、魔物も存在するなんて……そんなの、私で勝てるの？！

狼二、三匹くらいなら相手にできるようになつてきたけど、今回は群れだ。魔物なんて、初めて遭つたし……。

茂みがガサガサと動く。はつと本から顔を上げると、狼たちが走つてきた。

「あーもう！ 考える時間くらいちょうだいよ！ 第二【ダブルライト・バリア】！」

私は光属性の魔法でドーム状のバリアを作り、自分とクマノさんたちを囲む。

数匹の狼が飛びかかってきた。吠えたり唸つたりしながら、爪や牙を突き立てる。

だけど、バリアを破ることはできない。

少しだけほつとしていると、暴れる狼たちの後ろから、巨大な影が現れた。

普通の狼たちより身体も大きく、口からは牙がはみ出している。緑色のたてがみが逆立てていて、見るからに狂暴そうだ。

あれが——ウインドウルフ。

「グルルルル……」

「ウインドウルフが唸り、襲つてくる。爪が触れると、バリアが破れた。

「きやあ!?」

狼たちの攻撃に耐えていたバリアが、風船を割るように簡単に弾けた。ウインドウルフの爪が、私に振り下ろされ、思わずしゃがむ。

「——!? クマノさん！」

衝撃が来ないので顔を上げる。クマノさんが、私とウインドウルフの間に立ち塞がつていた。クマノさんは両腕でウインドウルフを押さえつけている。その足元には、ポタポタと血が垂れていた。

私を庇つて怪我をしたんだ……。

「クマノさん！ 私はいいからクマタロウくんを連れて逃げて！」

いつもなら言うことを聞いてくれるクマノさんが、私の叫びを無視して戦う。

ウインドウルフの前脚を掴んで、投げ飛ばした。

どうしよう……クマノさんはクマタロウくんと私を守りながら戦っているんだ。

私の使える魔法は第一二ランクまで。でも、第二二ライト・バリアはあつさり壊された。

これじや、打つ手がない。だけどこのままじゃ、クマノさんが……。

不安と恐怖で、ぎゅっと目をつむる。

『——サキ様』

「え、誰!？」

頭の中に、声のようなものが聞こえた。

『ネルです。戦闘中につき、直接思念を飛ばしています。サポートが必要ですか？』

直接——つて、そんなことができたの!? でも、今気に留めてる余裕はない！

『ネル、ウインドウルフを倒したい。クマノさんとクマタロウくんを守りたいの、できる!?』

『可能です。【付与魔法】の行使を提案します』

「エンチャントマジック?」

そういうえば、初めに魔法を練習した時に聞いたような……。

『付与魔法は、魔法にさらに魔法を重ね、様々な効果を……』

『説明はあとで聞くから！ やり方を教えて！』

『個体名クマノ、個体名クマタロウを、第二二ライト・バリアで囲み、そのバリアにさらに炎の魔力を込めます。以前にもお伝えしましたが、魔法発動に必要なのは、魔力・媒体・イメージです。今回の一回の付与魔法ではバリアの魔法陣を媒体として、さらに炎の魔力を付与します。イメージするものは、サキ様の世界でいう地雷です』

『じ、地雷!? そんなものイメージしろって言つたつて……ああもう！ わかつた！』

地雷つてことは、つまり触れたら爆発するイメージをすればいいんでしょう？

投げ飛ばされて倒れていたウインドウルフが身体を起こした。こちらを血走った目で睨むと、す

ごい勢いで走つてくる。

『では、唱えてください。【<sup>ダブルエンチャント</sup>重付与・フレアバリア】』

精一杯集中して、口にする。

【<sup>ダブルチヤント</sup>重付与・フレアバリア!】

第二ライトにより透明なバリアが発動する。それが赤色に変わり、クマノさんたちと私を囲んだ。

今までと違う……これが、付与魔法!?

飛びかかってきたウインドウルフの爪がフレアバリアに触れる。

バリアの外側で大きな爆発が起きた。

同時にバリアが弾ける。もうもうと煙が立ち込め、ウインドウルフが見えなくなる。

それが晴れると、ウインドウルフはふらふらになっていた。

クマノさんがウインドウルフを爪でなぎ払う。

ウインドウルフはすさまじい悲鳴をあげ、よろめきながら逃げ去ると、他の狼たちもあとに続いて森の中へ走つていった。

クマノさんは安心したのか、その場でぐつたりと横になつた。

「クマノさん!」

私とクマタロウくんは、慌ててクマノさんへ近づく。見ると、お腹に深い傷を負つてている。

「早く治さないと!」

私はクマノさんの傷口に手を向ける。<sup>ダブル</sup>第二で、間に合えばいいけど……。

【<sup>ダブル</sup>第二ヒール……】

私の手から柔らかな光が放たれ、少しずつだけど、クマノさんの傷が治つていく。

時間はかかつたものの、そのうちに完全に傷が塞がつた。起き上がつたクマノさんが、クマタロウくんの顔を舐める。

元気そうなクマノさんを見て、ほつとする。

「よ、よかつたあ……」

『お疲れ様でした。サキ様』

頭の中にネルの声が響いた。振り向くと、本の姿のネルが、ふよふよと浮いている。

そういえば、猫に戻すの忘れてた……。

「うん、ネルもね……。それにしても、話せるなら最初から言つてよ!」

本のページがペラリとめくれ、文字が浮かぶ。

『サキ様が森での読書生活を希望しておられたので、本の姿で会話していました。この【<sup>しねんでん</sup>思念伝達】のほうがよろしいですか?』

そ、そんな理由で……!?

「じゃあ、今度からその魔法で、直接話しかけてね……。ああ……それにしても今日は疲れたわ。

早く帰りましょう

私は念のためクマノたちを巣穴に送り届けた。それから、自分も洞窟に戻る。

部屋に入ると、どつと疲れが襲ってきた。猫に戻ったネルを抱っこしたまま、ベッドに倒れ込む。頭の中は、今日の戦いのことでいっぱいだつた。

バリアに襲いかかってくるウインドウルフの姿がまだ目に焼き付いている。

あのウインドウルフ、簡単に私のバリアを破つた……。

今回はクマノさんの助けを借りてなんとか追い返せたけど、クマノさんは重傷を負つた。それに、私たちを恨んでまた襲つてくるかも知れない。

……このままじゃだめだ。

「ネル、聞いて。明日から、魔法や武術の練習ペースを上げたいの」

『サキ様がそうおっしゃるなら。ですが、なぜですか?』

「もしウインドウルフが現れたら、クマノさんがまた傷ついたら、私が強くなつて、クマノさんたちを守りたいの」

『かしこまりました。では現在習得を進めているナンバーズの他、ワーズの習得に着手いたしましょう』

「わ、わーず?」

そういうえば、これも最初に魔法を覚える時に言われたような……。

ネルが私の腕の中で解説を始める。

『ワーズとは、ナンバーズに特性を付与する魔法スキルです。非常に高度な技術のため、全てのワーズを使いこなせる者はシャルズにもあまりいません。【魔力操作】<sup>まいりょくさうさ</sup>の練習により、サキ様も体得可能です』

ま、魔力操作……？ 聞いたことのない技術が出てきた……。

「例えば、どんなことができるの?」

『ワーズは【ア・ベ・セ・デ】に分類され、四つの意味と特性が存在します。【ア】は飛距離、【ベ】は速度、【セ】は持続性、【デ】は操作性をつかさどります。例えば、第一フレアをより遠くへ飛ばしたい時は【ア】のワーズを付与し、【第一・ア・フレア】として発動することで、飛距離が伸びます』

つてことは、より遠くから安全に敵を倒せたりすることだよね！

「なんかすごそう！ さつそく教えて！」

食いつく私に、ネルが冷静に答える。

『ただし、ワーズは最低でも第三ランクのナンバーズを使用できないと、獲得は難しいと考えられています。また、体得するためには魔力操作の練度が必要になります。魔力操作とは、魔力を精密に、かつ自在に操る技術です。身につけるには、イメージ力や精神力を相当鍛錬しなければなりません』

「な、なんか難しそうだね……」

『はい。しかもワーズはナンバーズと異なり、ランクによつて威力が固定される性質の魔法ではありません。同じワーズを使っても、術者の力量により性能は大きく異なるのです』

う、ものすごく大変そう……。今まで覚えたナンバーズは低ランクだつたし、習得の心得があるからほぼ一瞬でスキル化できていた。だけどワーズはスキル化できたとしても、頑張らなきや上手く使いこなせないつことだよね……。

私は、今後のこと改めて考える。

だけど、やっぱりこのままじゃダメだ……。

第二ランクのナンバーズまで習得したところで生活に不自由がなくなつたから、これで十分だと思つてた。

でも、今日わかつた。シャルズで生きていくには力がないといけない。私自身のことも、大切な存在も、自分の力で守らなきや。だから、これから頑張つていこう……。

決意する私の隣で、ネルは説明を続ける。

『ワーズを付与すると通常のナンバーズを使うよりも魔力を消費します。また、ナンバーズのランクが上がるごとに使用が困難になつていき……』

ありがとうネル……。でも、魔物のことで疲れたから、眠気に襲われる。もう限界かも……。今日はどりあえず、おやすみ……。

### 3 私の成長

——シャルズに来てから、三年が経とうとしている。

私は……ネルに聞いたところ、これで八歳になつたらしい。ちょっとは、背が伸びたかな?

ちなみにネルは魔法の猫だからか、ずっと子猫のままだ。やろうと思えば大きくなれるみたいだけど、可愛いからこのままでいいかなつて思つてる。

ウインドウルフに襲われてから三年——私はネルの指導のもと、ひたすら魔法の修業と研究を重ねた。

「にゃーん」

「うん、ありがとう。もう行くから」

私はネルを抱っこして、洞窟から森へ向かう。

そこには以前と変わらず、クマノさんとクマタロウくんがいる。

クマノさんのお腹には、治癒に時間がかかつたせいか傷痕きずあとが残つてしまつた……でも組み手での手ごわさは変わっていないし、とても元気だ。

クマタロウくんも三年で立派になつた。最近ではクマノさんとの組み手の後に、クマタロウくん

とも組み手をしている。これが、なかなか強いのだ。

「クマノさん、今日もよろしくお願ひします」

私がいつものように頭を下げる。クマノさんもお辞儀を返す。

私はふうと息をついて、意識を体内の魔力に集中した。

「……いくね」

魔力を足に込め、走る。

私はクマノさんの背後を取っていた。

——魔力とは、単に魔法を発動させるためのエネルギーではない。三年の研究と練習で、私はそれを知った。

魔力は身体能力の一つであり、魔力を込めるというのは、手を握る時に力を込めるのと同じことなのだ。だから、魔力を込めるとその部分の身体能力が強化される。

足に込めれば、こんな風に瞬時に移動することだってできる。

飛び上がり、クマノさんの頭を後ろから突く。しかし、読まれていたのか、右前脚で防がれる。

地面に着地すると、クマノさんに足払いをかけられる。よけて、距離をとる。

〔第二ウイング<sup>ダブル</sup>〕

私は自分の後ろに風を起こして加速し、クマノさんに迫る。クマノさんは、左前脚を振りかざす。「にゃーん」

ネルの鳴き声で、私とクマノさんはびたっと動きを止めた。

あれ、まだ組み手終了の時間じゃないはずだけど……?

ネルのほうを見ると、深刻な様子で伝えてきた。

『森の先に複数の個体反応があります。狼の群れのようですが、普通とは違う大きな反応が出ています』

「ウインドウルフ……?」

『はい、サキ様のお見込みの通りです』

「懐かしいなあ……」

私は二年前を思い出す。思えばウインドウルフのおかげで、ここまで強くなれた気がする。

『サポートは必要でしょうか?』

『ううん……大丈夫だよ。いつも通り、私の動きを見てて』

『承知いたしました』

さて——三年前のリベンジだよ。

ネルに教えてもらった場所で、狼たちを待ち構える。すると森から群れが飛び出してきた。

すごいスピードで、三匹が飛びかかるてくる。

「もうあの時の私じゃないんだよ!」

私は手に魔力を込めて、三匹の顔に掌底を打ち込む。三匹は一撃で倒れ、動かなくなつた。

私の戦闘スタイルは、ネルが考案してくれたものだ。ネルは膨大な知識から様々な武術を取り入れ、一番適した戦い方を編み出してくれた。だから私はこの戦い方を【ネル流】と名付けた。

三四がやられたせいか、他の狼たちは立ち止まり、警戒した様子でこちらを窺っている。

その一番後ろに控えているのは——ウインドウル  
あの時は敵わなかつたけど……今なら戦えるよ！

「ウインドウルフが駆け出す。唸りながら口を開き、巨大な牙で私の首元を狙う。

私はよけずに立ち向かう。ウインドウルフに掌底を繰り出す。が、よけられた。さすが魔物化したウインドウルフ……他の狼たちとは速さが違うみたいだね。

後方に下がつたウインドウルフは右前脚を持ち上げた。

すると緑色の風が起き、尖った爪に集まっていく。きた！ ウィンドウルフのオリジナル魔法スキル——

この三年間、徹底的に魔法を研究した。ナンバーズ、ワーズ、エンチャント……そして、オリジ

ナル。

オリシナルは魔物や人間が独自に生み出した魔法のことだ。魔力は川に魔属性の魔法を纏わせて鋭くし、攻撃力を増す効果がある。

ウインドルフへの対策を練るうちにわかつた。三年前、私の第二ライド・バリアを破つたのはダブル

この風爪だ。  
ふうそう

だけど、その対策はしつかりしているよ……。

オリジナル魔法スキルが使えるのは、あなただけじゃない。

飛脚

動する。

ウインドウルフの特性は高い機動性で近づき、強力な爪で近接攻撃を繰り出していくこと。だからこそ上回る速度で巨體を取る。

**ダブルエンチヤント** 二重付与・エアロバリア

迫つてくるウインドウルフと私の間に、薄緑のバリアが出現する。ウインドウルフが触れた瞬間

風が巻き起こり、身体を吹き飛ばす。  
ノハ 同じ風属性でいうか、ワイン

しかし同じ居候性がかりた  
ウーヌルノーは、口で伊勢を立て直した  
もしも風を利月して

でも……作戦通り。

四重付与・【悪魔ノ檻】

爪を私に突き刺す寸前で、ウインドウルフは黒いバリアに閉じ込められた。  
悪魔ノ檻――四重付与によって、相手を光属性のバリアに捕らえ、さらに炎・土・雷属性の魔

法をバリア内に起こす技だ。

捕まつた者は三属性の攻撃を同時に受ける。風属性の魔法しか使えないウインドウルフは、対応できないはずだ。

攻撃がやみ、バリアが解除される。体のあちこちに傷を負つたウインドウルフが、息を荒くしてこちらを睨んでいた。

だけど……まだ戦意は失っていないみたい。

ウインドウルフが憎々しげに吠え、風爪を振りかざして襲つてくる。

「いくよ……」

これが、私の三年間の成果……。

「第四・ベ・フレア！」

べは、魔法のスピードを上げるワーズ。

——この三年で、私はナンバーズを第九、ワーズを全種類使いこなせるまで特訓を重ねた。超高速の炎の弾を連続して放つ。ウインドウルフはよけようとも動くが、間に合わない。

いくつもの火の玉が、ウインドウルフを撃ち抜いた。

フレアを受けて、ウルフが倒れる。燃え盛る炎が消えると、焦げた死体が転がつていた。

ボスを倒された狼の群れは、怯えた様子で森の奥へ逃げていく。それを見届けて、私は大きく息をついた。

「…………勝つた、勝つたよ!!」

ついに私の力で、魔物を倒せるようになつたんだ。これでもう、大切なものを傷つけられることなんてないね。

「勝てたよ、ネル!!」

見守つてくれていたネルを振り向くと、私をねぎらうように頷いてくれた。

『お見事でした。サキ様の完勝でございます』

「…………やつたあ！」

そのあと、ネルに教えられ、ウインドウルフの死体を処理して体内の魔石を回収した。魔石を放置すると、影響を受けて新しい魔物が生まれやすくなるらしい。

作業を終えて一息ついていると、クマノさんとクマタロウくんが近寄ってきて、顔を舐めてくれる。

「くすぐつたいよお」

舐められながら二匹の頭に手を置く。今回はクマノさんもクマタロウくんも無事でよかつた……。

「ここまで強くなれたのはネルと、クマノさんたちのおかげだね……」

クマノさんは撫でられて気持ちよさそうな顔だ。クマタロウくんも『僕も僕も』と言わんばかりに頭をすり寄せてくる。

「ふふ……これからは私がクマノさんたちを守るからね。さてと……一緒に帰ろう！」

今日はお祝いに、クマノさんたちと美味しいものを食べないとね。

前世ではやつたことないけど……BBQとかしちゃおうかな。

ウキウキしていると、クマノさんが私を背中に乗せてくれた。ネルは私の肩に乗り、クマタロウくんは隣を歩く。

こうして私と三匹は一緒に洞窟に向かつたのだった。

## 4 三年ぶりの遭遇

ウインドウルフを倒して、一週間が経つた。今日は森に出て狩りをしている。

お祝いのBBQで、けつこうお肉を消費したのだ。

クマノさんもクマタロウくんも喜んで食べててくれたので、私もいっぱい食べちゃった。

ネルに『肉の備蓄が底を突きました』と言われ、慌てて狩猟に出ることにした。

でも狩りといつても武器は使わず、森の動物を雷属性魔法で倒すだけなんだじね。

「ふう…こんなもんかな」

一時間ほどで、猪二頭、野鳥四羽を捕獲し、解体した。

【収納空間・食糧】

唱えると、何もない空中に丸い穴が現れる。私はそこへお肉をしまっていく。

これも修業中に作ったオリジナル魔法スキルだ。デイション空間属性と特殊属性をかけあわせ、自由に物を出し入れできる亜空間を生み出した。デイション空間属性で生み出した収納スペース内は、ユニーク特殊属性で時間を止めており、しまった肉や野菜は新鮮なまま……贅沢な冷蔵庫つてところだね。

ちなみに食糧の他に【武器】【素材】【アイテム】の収納空間も作つてある。

「よし、これでしばらくは……」

「うわあああああ!!」

私はビクッと身体をすぐませた。

な、何……？ 今の悲鳴、人間だよね？ 今までこの森で、人間に会うことはなかつたのに。

久しぶりに聞く人の声が、叫び声だなんて……。何があったんだろう。

同行していたネルが呟く。

『北西の方向ですね』

「場所……わかる？」

『把握しています。向かわれますか？』

「……いちおう、ね」

こうしてネルの案内で、声のしたほうへ向かつてみると、そこでは――